一日目 …

珍しく昼ごろに目を覚ました。眩しい日差しが目に入り、今日はなんていい天気なんだと少し嬉しくなった。こんな晴れの日に体を動かさないのは損だと思い、友達に電話をしてメンツを集めてサッカーすることになった。こんないい日は滅多にないと少し奮発して芝のピッチがある公園を借りた。乾いたピッチ、照りつける太陽、目を閉じれば大歓声が聞こえそうな最高のピッチコンディションだった。気合を入れてアップを始め、いよいよ試合開始。出足から快調に飛ばした。スタミナには全く自信がないが、子供のように何も考えずボールを追うことに夢中だった。照りつける太陽に体力は容赦なく奪われたが、それ以上に楽しかった。まるで、さんさんと輝く太陽に照らされ青白く、しかししっかりと光る月のように自分は輝いていた。こんなに充実してスポーツをやれるのは初めてだ。自陣ゴール前からボールを受け取り、ゆっくりとドリブルを始めた。一人、また一人と敵をかわして行く。このピッチが自分を中心に動いているような感覚に包まれながら最後のキーパーをかわし、ゴール。その瞬間伝説が生まれた … 。

その後、僕はピッチに倒れ込み少し意識を失っていた。その間に不思議な夢を見た。

二日目 …

昨日の疲れだろうか、体が重い … 。しかし、気持ちは充実していた。まだ昨日の感覚をはっきりと覚えている。その感覚を思い出しながらボールを蹴るが昨日のようにはいかない。なぜだろう、この時期にしては暑いな。それに太陽も近い気がする。しかし、今日は疲れを取るためにもう休むことにしよう。

三日目 …

蒸せるほどの暑さに目が覚める。暑い、しかも蒸す。最近の異常気象は地球温暖化のせいか。やっぱり、ハイブリットカーなど細かな所から徹底しなくてはいけないな。それにアメリカなどの先進国が率先して $CO2$ を減らさなければいけないのに、今の小泉とブッシュは何をしてるんだ！暑さのせいか、イライラする。

四日目 …

今日も暑い … 。布団は汗でぐっしょり、べたつく肌がさらにいらだたせる。シャワーに入ろうとすると、兄が入っていた。それがとても腹立たしく久々に

殴り合いの喧嘩になった。もちろん、この年で喧嘩をしたので兄と僕は病院で治療を受けても痛みはひかない。こんな事で喧嘩をした母は僕らに腹を立てて説教を始める。もはや、そんなものに聞く耳をもたず。今日は寝る。家族関係がギクシャクしていた … 。

五日目 …

太陽が近い。絶対に近い。ニュースでは津波警報が多発しており、落ち着かない。そんな周りの状況に人はさらに落ち着かなくなる。イライラしたり、誰とも接しようとしなくなっていた。誰もが信じられない … 。

六日目 …

海面がすぐそばに迫っていた。みなが高い所に必死で逃げようとする為、人が人を蹴落とす地獄絵図のような状態になっていた。もう世界の三分の二の人口が死んでいた。しかし、津波のせいではなく人が人を殺すというのが多いのだと思った。人は信用できない。近づく人間は危険だと、さらに不信感を募らせた … 。

七日目 …

そして、人はいなくなり動物だけが身を寄せ合うように生き延びていた。

月曜日、その日わたしは念願の世界一周旅行へと出発した。AM8:00 ちょうど成田空港発のオーストラリア行き。心躍らせながら、飛行機に乗り込んだ。その日は、シドニーのお洒落なバーで一夜を明かした。

火曜日、オーストラリアを後に南極に立ち寄った。もちろん南極大陸に足を踏み入れるのは初めてなわけで、ペンギンや、アザラシとの出会いに感動し、寒さも気にならないほどだった。

水曜日、南極からアメリカ合衆国に旅立った。自由の国アメリカ。その日は、ラスベガスで一夜を明かした。ギャンブル三昧。すばらしい日々だ。ただ、カジノで目にした世界地図に違和感を覚えた。「太平洋ってこんなに広かったかな‥。」

木曜日、アメリカ合衆国から一路ブラジルへ。サッカー好きの私にとっては必ず行って おきたい国だった。「ポルトガル語で会話できたらどんなに楽しかっただろうか」と、少し後悔しながら、南米を発った。

金曜日、空路で大西洋を横断し花の都フランスのパリに入った。パリではワインを楽しみ、良い一日を過ごした。「一週間で 6 大陸制覇か。」寝る前に、明日の天気が気になり、「世界の天気予報」たるものをみた。「あれ、世界地図ってこんなんだったっけ‥」なぜかユーラシア大陸とアフリカ大陸以外は一面が海になっている世界地図を見ながら、床に就いた。

土曜日、エジプト入りした私はピラミッド、ナイル川に人類の歴史を感じた。

日曜日、私は残り 1 日の休暇を有意義に過ごすため、高速船で日本に帰国することにした。旅の疲れのせいか、乗船したらすぐに深い眠りについた。乗船して何時間経っただろうか。ふと目が覚めて、窓の外に目をやる。一面に広がる水平線。陸地などはどこにも見えない。「おかしいな。もうすぐ港に着くはずなのに。」再び強い睡魔に襲われベッドにねころんだ。そして、朝が来ることはなかった。

月曜日　　僕はいつも通り目を覚まして、学校に行く準備をして９時からの授業に間に合うために８時に家を出た。いつも通り僕は車で学校に向かっていた。お気に入りの音楽を流し、窓を開け煙草を吹かしながら、鼻歌を歌っていた。しばらくして、異変に気づいた。車が回りに１台もいないのだ。何かあったのかはわからなかったが、進んでいくにつれて、ましても不思議な光景を目にしたのだ。信号機が全部青なのだ。とてもスムーズに学校に行き、とにかく快感だった。いつもの時間のなんと半分で学校に着いてしまった。車を駐車場に止め、満足気に学校に入ると今までどおりの授業が始まり、友達とコミュニケーションをとりながら、１日の授業が無事終わったのだ。

火曜日　　今日は少し嫌な夢を見て目覚めた。自分は普通に町を歩いているのだが何時の間にか足の指がなくなっているのだ。恐ろしさのあまり走っていると水曜日の門があり、くぐりきったところで目が覚めたのだ。
　　不愉快な気持ちで今日もいつも通り車で家を出た。今日は昨日と違って車はいつもよりは少ないが、走っていた。しかし、またしても自分が通る信号機は全部青なのだ。まるで自分が中心になっているみたいに感じていた。そして、その日も学校では友達とコミュニケーションをとりながら、１日の授業が終わった。

水曜日　　今日の夢はまたしても自分に異変が起こる夢だった。歩いていたら昨日よりも足がなくなっている。今日はくるぶしのあたりまで、無くなっていたかな。そう思いながら目覚めた自分はただちに足に目を向けたが何事もなかった。そして、夢の中の自分は木曜日の門に入っていったのだ。不安な気持ちを抱きながらいつも通り車に乗っていると、今日はいつも通りの信号機で、いつも通りの時間についたのである。

木曜日　　夢はまた残酷になっていた。膝までなくなっているのだ。そして、車に乗っていると今日はなんと、すべての信号機が通ると同時に黄色に変わっていくのだ。時間は昨日よりはかなり早くつくことになったが僕は不安になる一方だった。

金曜日　　次は腰までなくなっており、うつ伏せになりもがきながら自分は土曜日の門に入っていく夢を見た。なぜそのような夢をみるのか不思議でたまらなかったが、とにかく学校に行くしかなかった。しかし、なんと信号機はほとんど赤になっており、なかなか学校までたどり着けないのだ。着いたのが１０時過ぎになってしまった。大遅刻である。

土曜日　　朝、僕は叫んで起きる事になった。夢の中の自分は首だけになっ

ており、日曜日の門に転がっていくのだ。自分は死ぬのではないかと思いながら、車を運転してみると信号機の赤はちっとも青にならずとうとう学校に着く時間は１２時過ぎになってしまった。２日連続大遅刻だ。

　日曜日　　今日はいつもの変な夢を見ず車で学校に向かう事になった。しかしまたしても信号機が赤になっている。しかもずっとそのままなのだ。車は絶え間なく横切っていくのだ。通るすきをあたえてくれない中、僕の足はアクセルを踏み込んでしまったのである。

月曜日　　年も明け数日が過ぎた。まわりは穏やかで、それでいて賑わっている正月独特な雰囲気だ。僕はこの雰囲気が好きだ、でも今年の正月は楽しめそうもない。僕の世界は暗闇だ。明かりはささない。出口も見えない。このままぼーっと過ごすのだろうか、せっかくのこの冬休みを。

火曜日　　「いつまで寝てるわけ？」という妹の怒鳴り声で僕は目をさました。もう昼だ。確かにいつまで寝るのか、自分でもあきれる。嫌な夢をみていた。去年の暮れに一年つきあっていた恋人にふられた。そのことを夢で何度もみる。さんざん嘘をつかれその度に喧嘩し、もう嘘はつかないと何度も言われた。だが結局は最後まで嘘をつかれ、そして裏切られた。もう人は信用してはだめだと自分に言い聞かせた。またか、自分でも嫌になる。そんなことを考えながら僕はビデオ屋に借りていたビデオを返しに言った。

水曜日　　また嫌な夢をみた。今度は僕のまわりの人々が何かにコントロールされていて僕の前でその人物の存在の演じている。何かはわからない、でも確かにそれはその人自身ではなかった。悪夢だった。起きたのは夕方だ、最近睡眠時間が長い。

木曜日　　僕はもしかしたらこの世界に確かに存在しているのは自分だけで自分以外の人はただの僕の人生の登場人物で、その人にはその人の人生なんてないんじゃないかということを考えながら犬の散歩をしている。ばかばかしいがそれが間違いだということも証明できない。僕は少しずつ世界を疑いはじめている。

金曜日　　誰もいない。昼に目がさめ家誰もいなかったので外に出たが人が一人もいないのだ。どこにも。駅にもコンビニにも公園にも。

土曜日　　相変わらず人は一人も現れない。そもそもあれは人だったのか？やはり夢にみた世界は現実だったのだろうか？どちらにしろさみしい。人は一人では生きていけない。僕だけの人生になぜまわりに人がいたのか。それはこういうことか。必要だったのだ。それがたとえ偽りでも。

日曜日　　僕は家の近くのビルの屋上に立っている。この高さならさすがに死ねるだろう。独り言を話していた。僕は死ぬ。死ぬべきなのだ。それが世界が僕に伝えたことだろう。僕を独りにすることによって。そろそろ飛ぼう。もう独りの世界は耐えられない。そして僕は飛び降りた。

月曜日。
目覚めると私はベッドの上にいた。今日も一日が始まる。何か楽しい夢でも見たのか心なしか気分が晴れやかだ。今日は良い一日になりそうだ。電車のラッシュも今日は気にならない。頭がフワフワする。あぁ、いい気持ちだ。心地よい浮遊感だ。授業もスラスラ頭に入ってくる。先生も機嫌がいいようだ。あぁ、今日はいい日だ。そうだ、帰りに本屋へ行こう。確か、大好きな漫画の新刊が発売されているはずだ。きっと夕飯も私の大好物だろう。あぁ、こんないい日がまたあればいいな。私は晴れやかな気分で床についた。

火曜日。
目覚めると私は座っていた。そうだ、朝食を食べなくては。学校に遅刻してしまう。急がなければ。今日はバンドの練習日だ。ベースを持って学校に行かなくてはならない。あぁ、重い。なんて重いんだ。ベースとはこんなに重かっただろうか…？私が背負っているものは本当にベースなのだろうか。しかしそんなことにかまっている暇はない。とにかく私はこれを背負って学校へ行かなければ。あぁ、遅刻してしまう。急がなければ。何かを忘れているような気がするがそれを気にする時間はない。急げ、急ぐんだ。

水曜日。
目覚めると私は札束を握っていた。何か空虚な感じだ。心が満たされないこの感覚はなんだ？この札束を使えば、満たされるだろうか。あぁ、私は飢えている。何がそんなに欲しいのか？…わからない。しかし私の欲望は止まらない。私は貪欲だ。だれか、私を満たして。

木曜日。
目覚めると私の愛犬が私の知らない他人とじゃれあっていた。楽しそうに尻尾を振る愛犬をみて私の心に嫉妬の念が疼く。そんな他人に心を許すな。こっちへおいで。そいつはお前を愛してなどいないのだから。お前を一番可愛がってあげるのはこの私よ。さぁおいで。いくら呼びかけても振り向きもしない愛犬を私は妬んだ。ついには愛犬もその他人もどうでもよくなってしまった。

金曜日。
いつもどおりの一日が過ぎた。いつもどおり。いつもどおりって何だっけ…？頭の芯がはっきりしない。そう、ただ誰かがにこやかに笑っていたような気がする。それはまるで天使のような微笑だった。だがあまりに整いすぎているその微笑に、あまりの神々しさに私は鳥肌がたった。

土曜日。

目覚めると私は罵られていた。「なんて傲慢なヤツだ！」顔も知らない男に私は罵られている。貴方は誰？…お前は誰だ？なぜ私はこんな男に罵られているのだろう。いや、私は傲慢なのか？あぁ、そういえばそうだったかもしれない。

日曜日。
私は目覚めているのだろうか。意識はあるのに何も見えない。何も聞こえない。真っ暗だ。全てが闇だ。自分がここに在るという確信が持てない。とても怖い。あぁ、怒りが私を満たす。この世の全てが憎い。何もかも大嫌いだ。…違う、私はこんなこと望んでいない。あぁ…そうだったろうか。思考が考えることをしてくれない。憤怒が私を犯す。あぁ…七つの罪が怠惰な私を突き落す。あぁ、落ちる落ちる。このまま私はどこまで落ちていくのだろう。

佐野 友和

1日目　寝坊をした。自慢ではないが、今まで私は寝坊をしたことがない。なぜなら私の部屋は日当たりがよく、朝陽が差し込む時間には起きるからである。夏は朝早く起きてジョギングをするのが日課であり、冬は丁度よい時間に起きることができるという、目覚まし時計要らずの身体を持っているからである。天気の悪い日でさえ、私は寝坊したことがない。しかし私は今日寝坊した。いくらまだ吐く息の白い季節とはいえ、いつもなら働く身体の機能が役目を果たさなかった。

二日目　今日も寝坊した。寝坊というのは時に致命的なミスを生む原因となり、テストに遅刻したことで来年も同じ学年になってしまったのは確定的になってしまった。しかし、私は留年という事実よりも、寝坊をしたということのほうがはるかに違和感を感じていた。

三日目　次の日も寝坊をした。しかも昨日よりさらに増して。これではまずいと思い、生涯は初の目覚まし時計を購入することを決意した。今月の食費を削って…。私にとってこれほど無駄な買い物ないと思いつつ、タイマーをセットして眠りについた。

四日目　それからというもの、私の考えとは裏腹に目覚まし時計は大活躍をし、学校に遅刻することはなくなった。しかし何かがおかしい…起きれなくなったのは私の体の変化だと思っていたのに、何にかがいつもと違う…。

五日目　朝起きると暗い…暗いのだ。もう朝八時になろうというのに、星が煌々と輝いている。最初は天候のせいだと思っていたのだが、本日は晴天なり。ではどうしたのだろう？答えはひとつ。夜の時間が長くなったのだ。いや、そんなはずはない。昔から季節によって多少の変化はあるのだから、その影響だ。そんな風に自分の中で討論していると、テレビのブラウン管を通して、いかにも科学者っぽい雰囲気の男が、絶望色の言葉を発した。「地球が急速に太陽系から外れて行っている」

6日目　それからというもの、太陽の力を失った生命体は急速に生きる力を失い、人間も例外ではなかった。今まで当たり前にあった太陽エネルギーを失った生命体は、砂でできていたかのようにもろく崩れていった。

7日目　地球が太陽系を外れた理由。それはブラックホールに引き寄せられていくためだった。ブラックホールに入った地球は、簡単に宇宙の塵となり、長い歴史がたった7日間で幕を閉じることとなった。

「明日世界が終わるとしたら、何をするだろうか？」　こんな質問を持つのは映画の中だけだと思っていた。少なくとも、今日までは。

授業が終わって、学校からまっすぐに帰れば、いつも5時半頃で、母親が夕食の仕度を始めようとしていて、私はソファに寝転びテレビを見た。いつもの夕方の我が家の風景だった。しかし、6時のニュースは、いつものニュースではなかった。「今日、日本時間午後3時、アメリカホワイトハウスでブッシュ大統領による会見が開かれました。会見で、ブッシュ大統領は『7日後に地球に惑星が衝突し、人類だけでなくすべての生物とともに地球は滅亡する。』と発表しました。」もちろんいつもどおりアナウンサーは冷静でけれどいつもより沈痛な面持ちで、それでいて淡々と伝えた。さらに「これについて日本政府の小泉首相は、『アメリカの発表は事実であり、混乱を避けるために今日まで発表されなかった。これにあたり非常事態宣言を発動する。』というコメントを発表しています。」と、伝えた。「まっさかぁ~。」… この一言が私の感想。でも、チャンネルを変えても変えても、流れているのはそのニュースだけで、7時になっても8時になっても、ニュースは終わらず、私の見たい番組は結局放送されなかった。ニュースで今日一日中流れていたホワイトハウスの会見の様子は、母と私の大好きなブルース・ウィルスとリブ・タイラーの出演している映画『アルマゲドン』そのものだった。悪い夢のようだった。これは現実か？これは紛れも無い現実だ。そして『アルマゲドン』のように、石油採掘のスペシャリストであるハリー・スタンパー（ブルース・ウィルス）とその仲間がＮＡＳＡと協力して助けてくれるわけではない。誰一人として地球を救ってくれるヒーローなんていないのだ。悲しいことに。地球の余命は、あと7日しかない。

地球の余命はあと6日。しかし、私の寝坊癖にはそんなことは関係なかった。起きたころには太陽が昇りきっていたし、ケータイには夜遅くまでメールをしていた相手の返事が読まずにそのままになっていた。いつもどおりだった。そして地球滅亡のニュースは今日も四六時中流れていた。そしていつもどおりおなかが減った。地球の命はあとわずかで無神経なようだけど、やはり空腹は耐えられない。食事をして、買い物に出かけた。新しい洋服を買った。何回着られるのかわからないけど、買ってしまった。夕方には帰宅し、またごろりとソファに寝転んで、昨日と同じ時間のニュースを見た。ニュースの内容も同じだった。そういえば今日は学校に行っていない。いいんだ、あと6日で学校だってなくなってしまうのだから。お昼まで寝ていたから、夜は眠れなかった。だから、毎日つけている日記に、残りの5日間に私がすべきことを考えて書き

留めておいた。まず、高校時代の仲の良い友達や家の遠い友達に連絡を取ること、次にこないだ始めたばかりのバイトの初給料を使うこと。三つ目は、家族やもっと身近な友達に会い感謝すること。四つ目は、自分を自由にすること。五つ目は、残りの人生というか 5 日間を存分に楽しむこと。　残りは 5 日間、どこまで達成できるのかわからないけれど、がんばってみようと思って、明日のために早く寝た。

そしてあと 5 日。とにかく朝急いで家を出た。私は学校に向かってはいたが授業のためではない。まず三つ目の目標である身近な友達に会うためだ。大切な友達や先輩に会い、思い出やたくさんのことについて話をした。1 分 1 秒だって惜しかった。今まではいくらでも時間を持っているような気がしていたし、いつまでも一緒にいられるような錯覚をしていた。時間が経つのはとても早くて、気がつけば夕方だった。友達にはまた会えるような気がした。だから悲しい気持ちにはならなかった。帰り道に、アンジェリーナの大好きなモンブランを買って帰った。ダイエット中だけれど …· 口実は四つ目の目標の自分を自由にするということ。自分を甘やかして、好きなものくらい食べておこうと思った。夜になって、一つ目の目標である遠くに住む友達や会いにいけない友達に連絡しようと思った。私は手紙を書きたかったけれど、もう届くかわからないから、いろんな人にたくさん電話をかけた。でもまだまだ終わらない。。。しかし疲れて寝た。

地球の余命はあと 4 日。私の余命もあと 4 日。今日はバイトだったけれど、もちろん残りの毎日を楽しむためにバイトを休んだ。おとどい買った洋服を着て、友達に会いに行った。そしてまた夜になり帰宅した。私がこんなに毎日朝から晩まで家を出ていることは珍しいので、自分を自由にするという目標はずいぶん達成されたと思ってもよいだろう。そして夜はまた高校の友達に電話をかけた。「仲良くしてくれて、どうもありがとう」と、素直に伝えられた。だいたい電話もかけ終わって、ふと思った。「仲直りしたい人がいる …· 。」
しかしその人に電話をかけることはできなかった。優柔不断な私はいつもの私だけれど、あと 4 日で世界が終わるとしても思い切って電話をかけることはできなかった。

残りはあと 3 日。今日は家族とずっと一緒に過ごした。食事に行き、何の変哲も無い、でも久しぶりに感じられる家族との休日を過ごした。やはり今日も仲直りしたいあの人に電話をかけることはできなかった。

明日には地球滅亡という今日は余命 2 日。これといった予定もなかったので、部屋を掃除した。この家に住んで 4 年だけれど、あと 2 日お世話になる。そして 4 年間の感謝を込めて掃除をした。午後には遅めのランチをしに出かけた。

会うのは中高時代の大親友。大学に入ってからの積もる話は、本当に山のように積もっていて、富士山くらいにはなるんじゃないかな。富士山は言いすぎだとしても、とにかく話して話して … 。おしゃべりは尽きなかった。夕方になって帰宅して、久々にこないだと同じ時間のニュースを見た。ニュースの報道は数日前とは少し変わり、あと 2 日で終わる世界は混乱し、悲しみに満ちている様子を報道していた。略奪や殺人、悲観して捨て身になる人や、教会やお寺に行き宗教を学び始める人、そして祈る人 … 様々な人がいた。しかし私の日常は、バスも電車も時間通りにきたし、閉店しているお店は少しあったけれど、ニュースに出てくる空っぽのパン屋さんなんて一軒も無かった。みんながいつもと同じ時間に起きて、いつもの仕事をきちんとしているから成り立っている日常だった。そんなことを思いながら今日も終わった。

目が覚めた。そうだ、今日は地球最後の日だ。その最後の瞬間がいつくるのかさえよくわからない。6 日前の地球滅亡のニュースから、私はいろいろと考えて悔いの無い 6 日間を過ごしてきたつもりだ。そして、苦手な規則正しい生活も実践した。今日まで待ったが、やはりハリーのような地球を救うヒーローは現れなかった。もちろんその娘のグレース (リブ・タイラー) もだ。だからといってあの映画ができすぎたドラマだとは思わない。やはり今も私の一番好きな映画だ。今日こそ、あの人に電話をかけて、仲直りしようと思った。少しだけ話をして、大切に思っていたことを伝えようと思った。だって今日で最後なのだから。。。。お別れくらいは伝えようと思った。それで 5 つすべての目標を達成できる。今日はもう予定もないのだから、もう 1 時間だけ寝ていようかな。片付いた部屋で気持ちよく私は眠りについた。

私の気がつかない間に世界は終わっていた。

「明日世界が終わるとしたら、何をするだろうか？」

寺嶋 千景

月曜日

・私はいつものように 6 時に起きて学校に向かう準備をする。今日も 1 限からだ、何を着て行こうかと考えながらカガミと向き合う。出かける前の準備の過程で、カガミは絶対的に必要なのだ。でもこの時は気づかなかった、もう一つの世界での変化に … 。

火曜日

・今日もまたいつもの毎日。家を出ると、苦痛の 1 時間 30 分に及ぶ電車通学。ここにおいても、たまにカガミを取り出す。カガミはいつも真実を写し出す？一般的にはそう言われているし思われている。疑問を投げかける隙なんてどこにも無い。だからこの日も気付か無かったんだ、真実が写し出した、“ 現実 ” という偽の世界の存在に … 。

水曜日

・『ワタシは正直者！いつも真実を見ている「カガミ」です！だけど、あっちの世界の人は皆嘘つき！真実なんて見ようとしてない！皆、自分の中の思い込みカガミで現実を信じている！ワタシがいくら真実を写し出しても見て無いし見えてない！嫌になる！』

この日まで私は信じていたんだ、自分の思い込みによって創り上げられた“ 現実 ” という創造の世界に嘘や偽りなんて無いって！これが真実だって！

木曜日

・この日もいつもと何ら変わりの無い普通の日。まー、ただ一つ変わった事があったとすれば、すごく嫌な事があったぐらい。本当に嫌な事だった、だからカガミを見たら思った通りの寂しい顔していた … 。うん？人の顔のパーツなんて動かないよ？顔なんて変わらないよ？それなのに寂しい顔？どんな顔？カガミが写しだしたのはいつもの顔だよ。『ほらね！ワタシが真実写しても見ようとしない！』うん？今だれか何か言った？気のせいか … 。

金曜日

・私はこの日初めて「カガミ」と話した。他人から見れば、一人で鏡に話しかける

変な人に見えるかも。だけど、わたし達は本当に会話しているのだから。「カガミ」は何でも私の事知っていた !! 初めて気づいた！真実というウソの塊に！ウソも積み重ねれば、ある人にとっては真実となる … 。

土曜日

・相変わらず、真実のありかを見つけた私は、「カガミ」と話し続けている…。

日曜日

・今日はお休みの日。また暇つぶしに「カガミ」としゃべってみようかな。…カガミにいくら話しかけても、だれも話さない。目の前に自分はいるのに…。何も返事してくれない…。

え !? ワタシいつからこっちの人間になったの ??

ある月曜、僕は不思議な夢を見た。友達に野球を観にいこうと誘われ野球を見に行った。僕のファンのチームの試合だったので僕はワクワクドキドキしながら球場にいった。席は D-77 だった。ポップコーンやジュースなど手に取りながらのんびりと試合を見ていた。すると選手が打ったファールボールが僕達のいるスタンドの方に飛んできた。僕はそのボールをなんとなく目で追いかけるだけだった。すると僕の座っているところに落ちてくる。どんどんボールは大きくなる。そして当たると思った瞬間夢から覚めた。パっと起き上がった瞬間汗だくだった。夢か…。外はとても晴れている。時計を見て焦った。遅刻だ。

火曜日昨日と同じ夢をみた。また汗びっしょりだ。この日も遅刻しそうだったので走って学校にいった。また遅刻するよ…。

水曜日変わらずあの夢を見る。自分はかなしばりや幽霊を信じないし見たことも体験したこともない。こんなあかしな体験初めてだ。しだいに不安になっていった。

木曜日この日もまたあの夢。さすがに不安になり自分の身近な人に相談してみた。みんな考えすぎだよという。たしかに普段からネガティブなところがあるからマイナスにばっかりなりがちだ。きっと気のせいだ。

金曜日もいつもと同じ。この日は学校が休みだったので予知夢についてインターネットで調べてみる。いろんなことが書いてあった。いいこと悪いこと盛り沢山。でも解決にいたらずやめた。考えても何も変わらないからだ。

土曜日は午前中授業があり、そのあとご飯を食べにいった。するとそこで友達が野球のチケットが入ったんだ。明日見に行かないといわれそんなこと忘れてＯＫした。その試合のカードはあの夢と同じだった。不安があったが何か変わるかもしれないと行くことにした。

そして日曜を迎えた。夢ではドキドキワクワクしていたが今日は別の意味でドキドキする。そして球場に入りポップコーンやジュースを買い席に座った。なんと座った番号も同じだった。こんな偶然あるのか。そしてしばらくしてからゲームが始まった。一回からすごい不安だった。しかし次第に試合を観戦していくうちにだいぶよくなった。そして 9 回裏 2 アウト。僕はもう終わると安心した瞬間選手が打ったボールがぼくたちのいるスタンドに飛び込んできた。ぼくは頭が真っ白でただボールを見つめていた。そしてボールはどんどん大きくなる、そのあと目の前は真っ暗になった。

月曜日、この日わたしは大学での授業が 1 限からあったため、朝 7 時に起床した。 1 限の授業に間に合うように逆算すると、 7 時に起きなければならない。

このところ私は 1 日中休みという日がなく、毎日朝から予定があってとても忙しかった。　今日だって、 1 限から 5 限までビッチリ授業がある。 5 限が終わるのは 17 時 50 分。すぐ家に帰って、夕食を食べ、風呂に入り、眠らなければならない。なぜなら、明日も 1 限から授業があるからだ。私は 7 時に目覚まし時計を合わせて眠りについた。今日も充実した良い 1 日だった。

火曜日、この日も私は 7 時に目を覚ました。いつものように 1 限の授業に出る。今日は授業が 3 限までだ。そのため、私は授業を受け終わると、バイト先に向かった。今日のバイトは 21 時まで。バイトが終わると、とても疲れたので真っすぐ家に帰った。そして、私はまた今日も目覚まし時計を 7 時に合わせて、眠りについた。

水曜日、今日も 1 限の授業に出るために大学に向かった。大学に到着して、掲示板を見た。すると、めずらしく今日は私がとっている授業が全て休講だった。久しぶりの休日で、とても嬉しい。しかし、せっかくだからと思い、高校時代の友達を誘い、遊ぶことにした。その友達とは久しぶりの再会だったため、会話も弾み、帰りは終電になってしまった。楽しい 1 日だった。

木曜日、いつものように 1 限からの授業を受け、その後バイトという生活を送った。休みたいという気持ちもあるが、私には忙しい毎日が楽しくて仕方がないようだ。

金曜日、この日の授業は 5 限のみだった。そしてバイトもない。日ごろの疲れからか、授業のギリギリの時間まで寝ていたし、家に帰ってからもずっと寝ていた。結局この日、食事すら 1 度もしなかった。予定がないと、あまり動く気にはなれなかった。何かおかしいと感じた。

土曜日、わたしは朝から夜まで 1 日中バイトをした。ヘトヘトに疲れた。やっぱり、このくらい疲れている方が私は充実感を感じていることに気付いた。

明日はついに 1 日中休みだ。本当に久しぶりの休みだ。予定がないのが、寂しく思えるくらいだ。なぜだろう !? 昼ごろまでゆっくり眠れるなぁ ~ と思いつつ、私は目覚まし時計を OFF にして眠りについた。

日曜日、私の目覚まし時計が鳴ることはなかった。そして私もこの日、目覚めることはなかった。

火曜日、朝起きて窓を開ける、今の季節はまだ肌寒い。いつものようにお湯の出る方の蛇口をひねると、冷たい水がいつまでたっても出てくる。…故障かな。仕方なく水で洗うことにした。お腹がすいたので朝御飯を作ろうとガス線をねじると、今度は火がつかない。何度も繰り返してみたがこっちも故障のようだ。早めに修理屋さんに直してもらおう。…今日は火が使えないみたいだ。

水曜日、はっと目覚めると今日はいつもより２０分も遅れて目覚めてしまった。急いで蛇口をひねる、どうしたことか水が出ない。昨日は火が使えず今日は水が出てこない。故障ばっかり一体どうなっているのだろう…バタバタと着替えを済まし、冷蔵庫の物を口に押し込み大学へ向かった。…今日は水が使えないみたいだ。

木曜日、昨日は水が出なかったためにお風呂にも入れなかった。目覚めも悪い。風邪をひいたみたいだ。今日はゆっくり休もう。いつも何気なく使っているものがなくなる、こんなにも大切なものだったのだと、そのありがたみに初めて気がつく。ぼうっと過ごすのにも、飽きたので外の空気を吸いに近くの公園まで行くことにしよう。外に出ると、いつものところにあるはずの木がなくなっていた。昨日まではあったはずだ。辺りを見渡すと、おかしい。木がどこにも無いのだ。公園にも、いつもの並木道にも…。…今日は木が無くなったらしい。

金曜日、息苦しくてめざめた。汗をかいている。まだ冬のはずなのに今日は真夏のように暑い。起きてテレビをつけた。いつもなら落ち着いて話しているニュースキャスターが落ち着かず強張った顔をしながらこう言った、「金星が突然なくなりました。」金星は、どうやら太陽が膨張している為に飲み込まれてしまったようだ。…今日は金星が無くなってしまった。

土曜日、太陽膨張の為、気温は朝から３０度。まだ冬の季節だというのに、異常気象だ。朝からこんな気温では、昼には何度になってしまうのだろう…。本当に何もしていないのに喉が渇く。防災用に準備してあったペットボトルの水もそろそろ底をつきそうだ。コンビニならまだ水を置いているだろうか。水を手に入れるべく外に出ると、ドアを開けた瞬間から焼けるような暑さが襲ってくる。…土がない。いや、ないのではない、砂漠化しているのだ。夜になると、月がまるで太陽のように輝いて砂漠を照らしていた。…そう、今日は、土がなくなった。

日曜日、今日も燃えるような暑さの中目覚めた。昨日よりもさらに暑い…。もう、動く気力も無く、どうしてこんなになってしまったのかを考える余裕も

なくなっていた。...すると、突然周りから光が消え失せた。驚いて手探りで窓をあけると驚愕した、ついさっきまで火のように燃えていた太陽が消えたのだ。暗闇だけがそこにあった。...今日は太陽が消えた。

月曜日、そう、太陽が消えてから、月曜日という曜日はなくなってしまった。そして、もう、一週間という周期も消えてしまったのだ。

火曜日は、火がこの世から消えた。

水曜日は、水がこの世から消えた。

木曜日は、木が消えた。

金曜日は、金星が消えた。

土曜日は、土が消えた。

日曜日は、太陽が消え、月曜日は太陽が消えた今、月は輝くはずもなく、月曜日は始まらなかった。時計針が動いているだけだった...。

吉岡 正成

僕は東京のほうで一人暮らしをしてる大学生だ。夏休みだっていうのに実家に帰っても家族とギクシャクするという理由でバイトもせずに家でダラダラ過ごしている。

一日目 ウチの大学は 90 %が一人暮らしで仲のいい友だちはみんな帰ってしまっていて遊ぶ相手もいない。今日もなにをしたというわけでもなく終わっていった。

二日目 夕方に目が覚めて、まだベットの中でボンヤリしてた。トイレにいきたくなったので、ベットから右手をついて起きようとしたとき、ガクッとなってまたベットに寝てしまった。あれ？と思って右手を見ながらもう一度動かしてみても全く動こうとしない。ただの痺れだろうと思ってトイレにいってからまたベットに入るとたっぷり寝たはずなのに眠くなってきていつのまにか寝ていた。

三日目 朝早く目が覚めると昨日のことも忘れており、ベットから起きようとすると右半身全体に違和感を覚えた。右側が全く動かないのだ。さすがに寝起きでもこれはまずいと認識でき、幸い病院がすぐ近くなので寝巻きのまま病院まで右足を引きずりながらむかった。医者にみてもらうと脳に原因があるのだが詳しくは検査しないとわからないので今から入院するよう言い渡された。まぁすることもないし、すぐ治るだろう。と、このときは気軽に考えていた。

四日目 目が覚めて、右半身の動きを確かめてみるとやはり動かない。ふと左手が気になって確認してみると動かないのだ。混乱してしまった。このままだと首から下全部動かなくなってしまうのではないか？医者に相談してみてもまだわからないしか言わない。どうすりゃいいんだとか考えながらまた一日が過ぎていった。

五日目 目が覚めると体全体がおかしかった。全く動かないのだ。悪い予感が的中した。首から下全部動かせない。しかも周りを見渡すと誰もいなくて、暗い個室にポツンとあるベットの上にいた。おーいとか叫んでみても誰もこない。

六日目 目が覚めて今日もまた動かないのかと思いつつ周りを見ようとしたら首が動かなくなっていてついに体全体を動かせなくなっていた。口とかはまだ動かせて、ときどきくる看護婦さんが口に運ぶ食べ物を食べられた。

七日目 目が覚めるとっていうか目が開けられない。口を開けようとしても開けられない。なんにも出来ない。出来ることはただただベットの上で寝ることだけ。

月曜日　晴れ。
「ん～…起きなきゃ。」私は目を擦りながら冷え切った部屋を暖めるためストーブをつけた。ジジジ…ゴォー。それまで眠っていた空気が点火の音と共に動きだす。今日も一日が始まる。私はストーブをつけに行った足でそのまま窓際まで行きカーテンを開けた。シャッ。「…ん？」
「…。…いー天気☆」なぜか今日は素晴らしく身体が軽い。まるで重力が半分になったようだ。まるで…

火曜日 晴れ。
今朝も昨日と同じくよく晴れた。私はいつものようにストーブに火を入れカーテンを開けた。「風邪引いたかな？」
昨日とは打って変わって身体が重たい。何をしてもだるさが付き纏う。
「でも今日はテストだしな～。行かなきゃ。」出かける時一応熱を計ったがいたって平熱だった。その日はテストが終わるとすぐに帰って念のため薬を飲みベッドに入った。

水曜日 曇り。
昨日早めに対処したのが良かったのか怠さは一日で消え、今日は気分爽快に目覚めた。空は曇っていたが足取りは軽く、出かける用意も早く終わった。スキップ混じりで交差点を渡り駅に向かう。いつものように満員電車に押し込まれながら駅を出発。電車が揺れる度右へ左へ人の波が押し寄せ揉みくちゃにされる。それでも私の体は軽く、押し寄せる波に身を任せていた。と、その時、隣にいたサラリーマンがよろめいて私の足を踏みつけた。
　「痛っ!!」
私は自分でもびっくりする程大きな声をあげてしまった。周囲の人はそんな大袈裟なといった様子でこっちを見る、サラリーマンはびっくりして謝る。しかし大袈裟でもなんでもなく本当に痛かったのだ。まるでハイヒールを履いたプロレスラーに踏み付けられたかのように。まるで…

木曜日 曇りのち晴れ。
今日は遅刻をしてしまった。
いつもの時間に目覚ましもかけてたし、ちゃんと目も覚めた。しかし体がなかなか言うことをきかず起き上がるのにいつもの二倍の時間がかかってしまったのだ。やっとの事で大学まで辿りつき講義をうけた。授業が終わると友達がやってきて私の肩をちょんと触った。私が振り向くと友達は怪訝な顔をしている。